

東アジア未来会議 奈良 2010

International Forum NARA 2010



DIALOGUE  FUTURE

「現在を見ているだけでも、 50年先を見るだけでもだめだ。 複層的に時代を 見通す力が求められる」

——加藤秀樹氏の基調講演より



平城遷都 1300 年記念経済フォーラム (奈良)

2010/9/4

平城遷都 1300 年という節目の年にちなみ、平城京の意味を現在の目で捉え直すとともに、日本と東アジアのこれからの 100 年をつくる新しいビジョンを提案する場として、東京と奈良で 3 回開催してきた。最終回となる今回は、奈良県新公会堂で「東の国の経済と文化 日本と東アジアの未来を考える」をテーマに、基調講演とパネル討論を開催した。

まず、主催者を代表し、荒井正吾・奈良県知事が、「1300 年前の奈良時代、日本は、グローバルセンターとしての唐をはじめ、東アジア諸国との交流のおかげで、『文明の敷居』をまたぐことができた。奈良には、当時日本に入ってきた文明の跡が今も残り、当時確立された律令制度を基に、日本の政治制度も築かれていった。そのような日本の知恵に思いを寄せ、今日のグローバル化の中で、今後日本はどう立ち向かうべきかを考えるきっかけを作ろうというのが、このフォーラムの趣旨だ」とあいさつをした。

次に、モデレーターを務める松岡正剛・編集工学研究所所長が「平城京はグローバルとローカルを組み合わせた都だった。今後の東アジアと米国と日本との関係を考える上で、平城京モデルを現在に引き出し、その可能性を探ることは、極めて大事なことはないか。また、アジアの多様性についても論じたい」と述べた。

続いて、オープニングメッセージとして、地元経済界と地元留学生が登壇。「奈良時代の国際化が進んだ背景には、異質の文化や価値を受け入れる寛容性があった。このような多様な価値の尊重が、東アジアと新たな関係を築く上で大きなカギとなる」(小林哲也・近畿日本鉄道社長)、「産業全般に国際競争が激化する中で、ものづくりの方法の転換が迫られている。中国など東アジア諸国と、密接な関係を築くために有望なのが観光産業で、地域活性化の切り札としても期待される」(植野康夫・奈良県経営者協会会長)、「古代史を学ぶには奈良が一番よいといわれ、昨年奈良にやってきた。平城宮跡でボランティア活動をするなど、書物だけでは学べない歴史に触れることができ、本当に奈良に来てよかった。日中間にはつらい歴史があるが、中国と日本、さらに世界との架け橋となって、交流の輪を広げたい」(李文釗・奈良女子大学大学院生)との意見や思いを語った。

基調講演では、「事業仕分け」を 8 年前から行っている構想日本代表の加藤秀樹氏が、「明日の経済社会を仕分ける」と題し、「事業仕分けを通して今の日本を見ると、形を作るためにいかに余計なことをしていることがわかる。最近ではハコモノだけでなく、制度やルールに及んでいる。無駄な形式化の背景には、世の中が複雑になっていること、グローバル化に伴い、統一基準を作るための定型化・数値化が進んで

「もう一度 日本独自の価値観を つくり直す必要が あるのではないか」

——渡辺賢治氏の発言より

いることがある。その結果、中身がおろそかになっているのではないか。表面的な数値や比較にとらわれると、判断を間違えるかもしれない。大切なのは視点を定めることだ。グローバルとローカル、ハイテクとローテク、集中と分散、普遍と固有、大と小、速いと遅いなど対になった概念があり、これまではおしなべて前者を目指す流れだったが、もう一度後者も見直す時代に来ていると思う。言葉と内容の違いをもっと日常の中で考えていかねばならないし、将来の日本と世界を考えると、現在だけでも 50 年先だけでなく、10 年先、30 年先…というように複層的に時代を見通す力が求められる」と述べた。

パネル討論には、松岡正剛氏をモデレーターに、加藤秀樹氏、村上憲郎・グーグル名誉会長、渡辺賢治・慶應義塾大学医学部漢方医学センター長がパネリストとして参加。「ネクスト 100 年のための価値創造」をテーマに語り合った。

「インターネットは、グローバルな立場でローカルが見られるし、ローカルな立ち位置でグローバルに手を広げられるものだ」「情報は個人のものであり、我々は個人が管理できる仕組みをもっと推進しようとしている」(村上氏)、「日本では世界の歴史の中でも例をみない漢方と西洋医学の融合が起こっており、世界から注目されている。日本ももっと、日本独自の医療、融合医療を発展させ、世界に情報発信してい

く必要がある」「将来、例えば、個人が一生分の健康データを、自分でどこかに預けることができれば、こんな素晴らしいことはない。情報と高度医療をどう結びつけるかということをもっと考えるべき。そうすれば新しい産業も生まれる」(渡辺氏)、「全体をよく見て、何が本物かそうでないかを考えることが大事だ」「東アジアは、例えば欧州が共通通貨を作ったからといってあせる必要はない。多様性を維持しながらどうハーモナイズするかが大事で、金融もローカルの基準があつてよい。グローバルとローカルを共存させるルール作りを国際的に議論したい」(加藤氏)などの意見が出された。

最後に、松岡氏が、「1300 年前、シルクロードを伝わってきたものに改良を加え、自分たちの文化としてきたように、日本人は多様性、多様なものを統合できる概念をもっている。これからの世界がどう動くかを見通すには、今一度、私たちは何を忘れてきたのかを総点検すること、世界を動かす通貨と言語を実際に情報ネットの中で作り直す作業をしてみる。ドルと英語だけでなく、情報ネットの中でも多様な通貨と言語が生き残るだろう」と総括した。

(主催・奈良県、日本経済新聞社)

「奈良では、
書物だけでは学べない
歴史に触れる
ことができる」

——李文釗氏の地元メッセージより



「東洋的なものも西洋的なものも みんな原型が奈良にあり、 そこで蒔かれた種が 順次花開いていった」

—川勝平太氏の発言より



平城遷都 1300 年記念グランドフォーラム—NARASIA2010 2010/12/18・19

平城遷都 1300 年記念事業を集大成するファイナルイベントとして、奈良とアジアをまたぐ「知」と「遊」と「祝」のトークセッションとパフォーマンスを奈良県文化会館で2日間にわたり展開。クライマックスとして、日本と東アジアの目指すべき進路を構想する提言集「平城京レポート」を発表し、政府に手渡した。

1 日目のプログラム

【都】

「OTOZURE—ICONO—NARASIA—」(書)のオープニングムービーのあと、荒井正吾・奈良県知事が「このフォーラムではさまざまなプログラムが繰り広げられるが考えるよりも感じていただきたい」とあいさつ。

続いて松岡正剛氏(編集工学研究所所長)とのトークでは、「今の東京を別にすれば、過去 1300 年のうち日本で最も国際的な都市は平城京」(松岡氏)、「奈良の値打ちのひとつは保存力。平安遷都で京都へ行かず奈良にとどまったために、正倉院宝物などは今まで残ってきた」(荒井知事)などの発言があった。

【風】

いとうせいこう氏(作家・クリエイター)、川勝平太氏(「日本と東アジアの未来を考える委員会」委員長代行・静岡県知事)、松岡氏のテーマトーク。

「かつての奈良はこんなふうに情報の伝達が行われるアジアの交差点であっただろう。奈良はアジアの OS (オペレーションシステム) だ」(いとう氏)、「京都のように完全な国際観光都市でないのが奈良の魅力。いま再び、古代の OS に新しいソフトを載せていくべきだ」(松岡氏)との発言があり、「東洋的なものも西洋的なものもみんな原型がこの奈良にあり、そこで蒔かれた種が順次、平安京、鎌倉時代、江戸時代、東京時代に花開いていった」(川勝氏)という指摘もあった。続いて、井上鑑氏(作編曲家・キーボード奏者)によるオリ

ジナルの「NARASIA2010 テーマ曲」が演奏された。

【文】

奈良とアジアをつなぐ弥勒ロード、唐草ロード、獅子ロードなどさまざまなロードがあったことを映像で映し出しながら、いとう氏と松岡氏をナビゲーターに、「日本と東アジアの未来を考える委員会」委員である、千田稔氏(奈良県立図書館情報館館長)、上垣外憲一氏(大手前大学総合文化学部教授)、竹内寛氏(日本電波工業株式会社代表取締役社長)、野田一夫氏(多摩大学名誉学長)、佐藤弘夫氏(東北大学大学院教授)、久米健次氏(奈良女子大学教授学長特命担当)、原田明夫氏(弁護士) 7 人によるチェントーク。平城京以前の約 100 年の飛鳥時代、16 年の藤原京時代も視野に入れて語られるべきで、当時の新羅、渤海との関係にも注目すべきという提案や、奈良時代の東アジアでは、人間だけでなく、カミ、ホトケ、外国の人、死んだ人など、声の聞こえるものと聞こえないものがあるという、現代とはまた違う世界観が共有されていたのではないかという意見が出た。

【身】

金子飛鳥氏(ヴァイオリン奏者・作曲家)、おおたか静流氏(シンガー&ボイス・アーティスト)、井上氏によるミュージックセッション。

【海】

現代アジアン・アート作品として、水中を人力車が走るジュン・グエン=ハツシバ氏の「ニャチャン・メモリアルプロジェクト」、ハンゲルで水墨画を描くユ・スンホ氏の「エコーワーズ」を紹介。

【間】

柿本人麻呂の万葉歌「ひんがしの野にかぎろひの立つみえてかえりみすれば月かたぶきぬ」と夏目漱石の「夢十夜」をクロスオーバーさせ、謡曲仕立てにしたパフォーマンスセッション。安田登氏(能楽師)、中村明一氏(尺八奏者・作曲

「奈良は アジアの OS (オペレーションシステム) だ」

—いとうせいこう氏の発言より



鳩山前内閣総理大臣に「平城京レポート」を手渡す荒井知事

「いま再び、
古代の OS に
新しいソフトを
載せていくべきだ。」

—松岡正剛氏の発言より

家)、土取利行氏(音楽家・パーカッショニスト)、おおたか氏が演じた。

【楽】

いとう氏と松岡氏のファイナルトークと出演アーティスト全員によるコラボレーションでこの日のプログラムが締めくくられた。「ひんがしの…の歌が詠まれたとき、亡き父(草壁皇子)の鎮魂と魂振りが同時に行われた」(松岡氏)、「A と B が同時にあるという二重のレンズで同時にみていくことで、過去にも未来にも自由に飛べる。それが奈良という OS の特徴だろう」(いとう氏)と総括された。

2 日目のプログラム

【時】

井上氏のピアノ演奏、「OTOZURE—ICONO—NARASIA—」(CG)のオープニングムービー。続いて、荒井知事と松岡氏によるオープニングトークが行われ、「奈良には幸運にも大極殿跡が残った。歴史のエネルギーが埋もれている。この一年を通じ、歴史との対話、歴史は死んでいないということがよくわかった」(荒井知事)、「アジア全体の文物が積層した奈良は日本の OS であるとともに、東アジアの OS だ。ソフトがバージョンアップされてきたかが問題」(松岡氏)などと述べた。

さらに、川勝氏と「日本と東アジアの未来を考える委員会」委員である、呉善花氏(拓殖大学国際学部教授)、齋内佐斗司氏(彫刻家)、渡辺賢治氏(慶應義塾大学医学部漢方医学センター長)の3人が登壇し、チェントークを行った。

今回のような平城遷都 1300 年の総括が、学術的報告でなく、芸術・感動を通して伝えられたことの意義は大きく、また、日中韓の3カ国は似たところよりも、むしろささいなことでも違う点を認識しながら相互理解を深めていく必要があるなどの意見が出た。

【衣】

ワダエミ氏(衣装デザイナー)によるトーク。映画「HERO」 「利休」 「中天」の衣装や映像を見ながら、俳優が身につけることで初めて完成する衣装をめぐる、どのように発想したか、また、染色のプロセスなどについて語った。

【交】

井上氏、金子氏、中村氏によるミュージックセッション。昭和に活躍した作曲家・武満徹、三善晃、早坂文雄の曲にアレンジを加えて演奏した。

李御寧氏(韓国梨花女子大学名誉教授)、張競氏(明治大学国際日本学部教授)のビデオメッセージが紹介されたあと、上村淳之氏(創画会理事長・日本芸術院会員)が登壇。大極殿内部の四神の壁画について東アジアの花鳥画を参考にしたというエピソードなどが紹介された。

【光】

「光」をテーマに、日本のパーカッショニスト土取氏と韓国舞踏家のキム・メジャ(金梅子)氏によるオリジナルのパフォーマンスセッションが披露された。

【臨】

奈良密教青年会による声明のあと、「日本と東アジアの未来を考える委員会」がまとめた「平城京レポート」(5つのステージから構成)が、川勝平太委員長代行、松岡正剛幹事長、荒井正吾事務局長から、政府代表の鳩山由紀夫氏(前内閣総理大臣)に手渡された。

【遊】

川勝氏と松岡氏によるファイナルトークが行われ、川勝氏が「『平城京レポート』が華のあるフィナーレの中、飛び立っていった」と総括。奈良密教青年会、まつぼっくり少年少女合唱団と出演アーティスト全員によるオリジナル曲「NARASIA」の演奏で、2日間のすべてのプログラムが終わった。(主催・日本と東アジアの未来を考える委員会、奈良県)